学生×商工会議所　タイアップインタビュー企画

ミライロしごと図鑑

10 NEXT YEARS

福岡商工会議所が150周年を迎える「10年後」をキーワードに
学生が成長企業の若手社員を取材し、将来の展望を探ります。

取材　株式会社エニセンス
小田島佑介さん　野口浩志さん

■今月の取材先　株式会社エニセンス　とは？
「個性のミカタ」を企業理念に掲げる福岡のITベンチャー企業で、スマホファーストのアプリ事業を中心に、ホームページ制作・運用、Webマーケティングなどを行っている。

学生スタッフ　NPO法人学生ネットワークWAN

「個性を活かし、福岡から新たなテクノロジーを創り出す」

株式会社エニセンスは、2007年にモバイルコンテンツプロバイダとして設立された。メディア事業、クライアントワーク事業のほか、自社開発のサービスを続々リリース。2013年4月より自社開発アプリ『My日記』を配信後、『Myメモ』や『Myアルバム』などの姉妹アプリもリリースし、これらの『myAppシリーズ』はノンプロモーションで累計300万ダウンロードを達成した（2019年4月時点）。2014年12月には、「男子のかっこいいが集まる場所」をコンセプトとするメンズファッションメディア『Boy.』をスタート。そのほかにも、福岡の音楽総合情報サイト『Music Fact FUKUOKA』を運営するなど、多様なサービスを展開している。

そんな株式会社エニセンスで自社開発のアプリ「myAppシリーズ」を手掛ける、エンジニアの小田島さんと、マーケターの野口さんに、10年後をテーマにお話を伺った。

お二人の仕事内容を教えてください。

小田島さん：私はエンジニアです。自分自身でプロダクトを開発するのはもちろん、エンジニアのグループ内でリーダーを務めたり、エンジニア以外の方とコミュニケーションを取る役割を担ったりもします。

野口さん：私はマーケターとして働いていますが、その他にも、リクルーターやフォトグラファーなどもしています。担当している業務の範囲がとても広いので、外部から受注するところから納品まで、制作以外の部分は全て関わっています。

（株）エニセンスの自慢できる点はどのようなところですか。

野口さん：可能性がある点です。社内には個性的な人しかいないですね。それゆえエニセンスの社員は皆、何を考えているのかよく分かりませんが、それはある意味、可能性を秘めていることでもあると思います。「一人ひとりの社員が可能性を秘めている」ことはエニセンスの自慢できる点だと思います。

小田島さん：たとえ、1年目でも大きな裁量権があり、そのおかげで成長スピードがとても速いところです。私は1年半前にこの会社に入って、エンジニアになりましたが、他の企業の1年半のエンジニアには負ける気はしません。自ら努力したのももちろんありますが、さまざまな仕事を任せてもらえる環境に恵まれていたからだと思います。

「個性のミカタ」これはエニセンスの企業理念ですが、個性の「味方」をして協力するということ、その個性を認めるという「見方」を持ち、共に成長しようという考え方です。これをもとに、自分達のしたいことやできること、世の中は今後どう変化し、その中でどのように生きていくのか、などを一人ひとり考えています。社員の中にはシャイで自らの考えを示すことが

苦手な人もいますが、週に1~2回行われるミーティングや課題が見つかるごとに互いの考えをぶつけ合うように努めています。意見を出し合えるからこそ、個性が認められていると感じることが多いですね。

個性が認められている組織のなかで大切にしていることや、成功体験はありますか。

小田島さん:私はリーダーになることが多いのですが、個性のあるメンバーの一人ひとりが仕事に対して何を大事にしているか考え、モチベーションを損なわないようにチームの方向性を決めることです。それでも方向性が合わず、激しく意見の対立があったりもします。その中で、それぞれが大事にしているものをうまく取り入れ「チームが1つになって動いている」と実感するときが良かったなと感じます。

小田島さんはアプリの開発を担当されていますが、これからの新しい技術は、どのようなサービスに使われると思いますか。

小田島さん:スマートフォンはとても破壊的なイノベーションだと言われています。そして、これからスマホと同じように世界にイノベーションを起こすだろうと言われているものが「AI(人工知能)」「5G」「量子コンピューター」などです。

これらの技術を使って、大きな資本力を持った企業が世界を変えていくと思います。エンドユーザーがどのようなサービスを使うのかということは、新しい技術がもつ性質からある程度予測がつくのではないかと思います。たとえば、AIであれば「マッチング」のサービス向上、量子コンピューターであれば「渋滞予測」の精度の向上などです。

IT業界において“福岡”が注目されるためには、今後、どのようなことが大切になると思いますか。

野口さん:一番はやはり「実績」ではないでしょうか。メルチャリのような福岡発の活動が増えてくると、様々な企業が「福岡でやってみよう」という動きを見せるかもしれません。

小田島さん:エンジニアは、サービス志向と技術志向の2つの考え方に分かれると思います。東京にはサービス志向のエンジニアが多く、逆に福岡には技術志向のエンジニアが多いと感じます。そこで、あえて、技術志向のエンジニアばかりを福岡に集めるのも一つの方法だと思います。技術志向のエンジニアが好きなように働ける雰囲気が生まれると面白いですね。

日本全体におけるIT業界の課題は何でしょうか。

野口さん:技術を持つ人々の人件費が高く、中小企業が雇いづらい点です。エニセンスはバングラデシュなど海外にもチームがあり、比較的人件費が安いので、海外と連携して開発しています。しかしこの体制が続くと、さらに安いリソースや人材を求めて開発を続けることになるので、社内で学生時代から育てた人材を雇うことができれば良いと思います。

小田島さん:日本はソフトウェア後進国であるため、これまで

(左)小田島さん (右)学生スタッフ

日本から新しいテクノロジーが生まれることはほとんどありませんでした。アメリカや中国で誕生したテクノロジーを、日本は真似してきたのです。他の国で生まれたイノベーションを真似すると、自国で起こるイノベーションが無くなってしまうので、日本でイノベーションの芽が生まれづらいことが課題だと考えています。

そのような課題を踏まえて、(株)エニセンスは今後10年でどのようなポジションになると思いますか。

小田島さん:何かしらの先駆者になっていると思います。今、エニセンスにはバングラデシュの社員がいますが、この強みを生かしてアジアにも事業を広げることができるのではないかと考えています。現在は、彼らにはエンジニアとしての仕事を依頼していますが、将来を考え今後はマーケティングも依頼したいと思っています。

個人的にはマネージャーのようなポジションに就きたいです。突き抜けたサービスを生み出すカリスマ的存在のリーダーを支える立場、すなわちナンバー2のようなポジションを目指しています。

野口さん:エニセンスは「予測ができない」会社です。どのような人やアイデアが集まり、どのような動きをするのか予測不可能です。10年後といった将来の話になると正直わかりませんが、その中でも1つ言えることがあります。それは、10年後この会社が残っているならば、myAppシリーズのほかにヒット商品が出ているということです。一般消費者向けの商品やサービスを武器に、IT分野で生き残っていきたいですね。

福岡や日本におけるIT業界の現状や今後の展望に目を向け、さらなる事業の拡大を目指すお二人の姿勢に感銘を受けました。
小田島さん、野口さん、貴重なお話をありがとうございました!

■NPO法人学生ネットワークWAN とは?
設立17年目を迎える学生主体のNPO。「学生だから~できない」「地方だから~できない」を変えるべく全国19地域の情報発信支援や、地域の関係人口をつくるコンテンツ企画運営をしている。私たちの運営するサイト「ガクログ」もぜひCHECK!!してください!
http://www.gakulog.net/